
傍らに神様

みなわ彌生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍らに神様

【Nコード】

N8732T

【作者名】

みなわ彌生

【あらすじ】

夏休みの間、祖母の家で暮らす事になった中学生の里菜。なんとなく足を伸ばした裏山には、思いもしない出会いが待ち構えていた。この作品は携帯向けHP「夜一夜」にも載せています。

傍らに神様（一）

家の裏手にはうつそうと木が茂っている。見るからに山、と言った風景が眼前には広がり、里菜はその深い緑をじっと見つめながら歩く。

里菜がこの家へ訪れた事は幾度があったが、裏山へ踏み入るのは初めてだ。

草や落ちている葉、細い枝を踏みながら進む道はあまりはつきりとはしていない。必要があり歩いたが為に道となったらしい痕跡があるだけなのだ。木々の間を通り抜けているのとなんら変わりはない。

見知らぬ景色を眺めつつ、じつとりと汗ばんだ体へ空気を送り込む為に服の胸元を掴みばさばさと動かす。

（日陰で涼しいんだけど……さすがに夏だからな）

高く伸びた木々に遮られ、わずかな光が届くばかりの山は暗い。ほんの少し前まで痛みすら覚えそうな暑い日差しを浴びていたとは思えない程に、木々の下は涼しかった。

しかし、見慣れぬ景色の為かそれとも薄ら寒く感じられる気温のせいか、どこか落ち着かない。

思いもしない何かが現れるのではないかとほんの少し体を強張らせ、視線をあちこちへ向けてみる。だが高く伸びた樹木が目に入るばかりであり、おかしなものなど見えはしない。

薄暗い中に木々の枝葉が触れ合う音、それだけだとわかっているにも関わらず、妙に恐怖心を煽られてしまうのだ。

不気味と思うからそう見えるのかもしれないと、里菜は気を紛らわすように数度首を横へ振る。

（ここは、ただの山）

それでも薄気味の悪い景色が変わるわけではなく、草を踏む音も嫌に耳に響く。特にこの場所へ用事があるわけでもないのだから、

引き返してしまっても良いはずが里菜はそれも気に入らない。折角だからもう少し先へ進んでみたいと、恐怖心よりも好奇心がわずかばかりだが勝っていた。

恐怖を押し込めるようにしつつ足を進め、程無くすると目の前には急に開けた空間が飛び込んで来る。

三メートル程の広さのそこは当然、木の柱に囲まれている。薄暗い山の中でもこの場所は真上からの光を取り入れているらしく、思いもしない眩さに里菜は目を細めた。

見上げてみれば太陽が見える範囲は随分と小さい。広場を囲む木々の葉は内側にも伸びているのであり、たまたま真上からたつぷりと光を取り込める時間だったらしい。

慣れ始めた目で見渡してみると、悠然とした不思議な空間であると気付く。

（綺麗）

切り取ったように丸く作られた広場には、随分と草が生い茂っているが木は一本もない。中央に苔むした三つの石でできたものが据えられており、これの為に作られた場所なのかと目を向ける。

雨ざらしの中どれ程の年月を過ごして来たのか、風化し丸みを帯びた姿で厳かにたたずむそれに、里菜は惹きつけられるように近づいた。

そして目の前へ立ち、しげしげと眺める。

（お墓？ ん、違う？）

四角の石板の上に中を繰り抜いたこれまた四角の石が乗り、更にその上へ丸みを帯びた屋根らしく見える石がある。繰り抜かれた石の中にはお札が一つ納められており、同じような物が三つ等間隔で並んでいた。

どうやら何かを奉っている所らしいと里菜は納得する。

（おばあちゃん家の物って事なのかな？）

裏山へ入った事もなければ話題に上った事もなく、里菜は中央の石の前にしゃがみ込むと何気なく苔むした部分に触れようとした。

「我に触れないでもらいたい」

そこへ突然聞こえてきた声に里菜は驚く。目の前には感じられない人影に慌てて振り返ったが、何者の姿も認める事ができない。

「え？」

声の主はどこかと視線を辿りへ走らせるが、やはり何の気配も感じられなかった。

（……気のせい？ それとも）

ついさっきまで薄暗い中を不気味に感じていた事を思い出してしまふ。

突然の出来事に激しく動悸する胸を落ち着かせようと、里菜は胸元を右手で押さえながら大きく息を吐く。

（お化けなんて……いないから。大丈夫）

言い聞かせるようにしながら何一つ変わらない景色を見つめてみると、再び声が聞こえて来る。

「我の声が聞こえるのだね、珍しい。我は里菜の目の前にいるよ、見上げてみるという」

言葉を聞きながらゆっくりと首を前へ戻した里菜は更に視線を頭上へと向け、次に大きく目を見開いた。

（……………なに？）

予想もしない光景に疑問だけが浮かび上がる。

「驚かせてしまったのかな？」

何も言えぬまま見上げているばかりの里菜に、声の主は小さく笑い声を上げた。

（何？ 何？ 何？）

何故か石の真上に着物をまとった少年がいたのだ。穏やかな笑みを浮かべ立っているようには見えなかったが、少年は確実に浮かんでいた。その上、向こうの景色がうつすらと透けて見える。

大きく瞬きを繰り返して里菜は少年を見つめた。石の上に浮かぶ半透明な姿に驚きうまく頭が働かない。

そんな里菜の様子を見て取ったのか、少年は諭すようにゆっくり

と口を動かす。

「我はここに暮らす神だよ？ 里菜」

声変わりを迎えていないであろう少年の声色は優しいものであり、恐れを感じはしない。

神とはどんな者だったかと里菜は考えたが、大して思い浮かぶものはなかった。目の前にいる少年が神なのかはわからないが、とにかく不思議な者だと理解する。自分と同じ人間には思えもしない。

「神……様？」

どうにか発した里菜の声に、少年は頷く。

「そうだよ。見える者に出会うのは何十年ぶりだろうか、嬉しいものだね」

苔むした石の上に浮かぶ透明な少年は、柔らかに微笑んだ。

今は七月の下旬。共に暮らす母が仕事の都合で三週間家を開けなくてはならず、里菜はこの土地へ来る事になった。

時折二、三日を一人で過ごす事はあったが、さすがに十三歳の里菜を長期間一人にはできないらしい。夏休みという時期も重なり、母方の実家で暮らす事になったのだ。

祖母の家は何度か訪れた記憶があるもののおぼろげであり、山という印象しかなかった。そして、その記憶は外れてはおらずこの家はすぐ裏が山へと繋がっている。里菜にとって自然が豊富な場所は身近とは言いがたく、まるで別世界のようにすら思えた。

一軒毎の距離も里菜が普段暮らす場所とは違っている。窓を開けるとすぐ側に隣の建物はなく、広い庭があり背の高い木もある向こうに隣家があった。その次もそれなりの距離を行かねばならない。

しかもどの方向を見ても家というわけでもない。何軒が続くとそれは途切れ、畑や田が広がる。ぱっと見ただけでも圧倒的に田畑が多い景色が広がり、更に向こうには違った山が大きく構えているのだ。

歩いて十分程も行けば、酒やタバコも扱う個人商店はあった。次に近い店は、更に二、三十分歩かねばならない。最寄りの駅へ向かう為にはそこから更に三十分。とてもではないが気軽に向かえる距離とは思えなかった。

バスを使用するという選択肢もあったが、それ自体も一、二時間に一本ある程度である。始発は遅く最終は早いと記している時刻表を見る限り、利便性が高いとは言えない。

近所には同じ年頃の子供はいないらしく、話すのはほとんどが祖母だ。叔父や叔母もいるのだが、二人共昼間は仕事で不在だった。従兄弟達も里菜より一回り以上も年上の為、就職し家から出てしまっている。

近所の人がお茶のみがてらにやってはくるが祖母と同年代の為、会話が合うはずもない。何よりもなまりが強く全てを理解できたためしもなく、愛想笑いと共に座つてはいるが退屈な時間だった。

携帯電話が使えないわけではないが、ほとんどがメールでのやり取りでありほんのわずかな時間のものだ。友人達も夏休みを色々と過ごしているであろう事がわかる為、里菜もあまりしつこくしようとも思わない。

夏休みの宿題があり、それにも手はつけている。本を読んだりテレビを見たり音楽を聴いたりとそれなりに過ごしてはいたが、何となく気分転換に散歩でもしたくなり、気まぐれに家の裏へと足を伸ばした。

そんな時に出会ったのが、この少年だった。

透明な姿で神と名乗り、自分の名を呼んだ少年を見つめたまま里菜は動く事ができない。

（本当に……神様？ それともお化け？）

一体これは何なのか？ 疑問がぐるぐると脳内を駆け回っているような気もしたが、答えは見つかりそうもなかった。里菜の常識の中にこんな者は存在しない。

「驚かせてしまったようだね。すまない、里菜」

申し訳なさそうに眉を下げた少年は、自然と里菜の名を呼ぶ。何故自分の名前を知っているのか？ 混乱と得体の知れない不気味さを感じながらもいやに乾いた口をこじ開けた。

「……どうして、わたしの名前を？」

質問に少年は、ああ。と小さく呟いた後に告げる。

「我はこの土地に通ずる者を護るのが役目。里菜の事も知っていて当然だろう？」

透き通った体から発せられる声は、不釣合いな程にはつきりと里菜の耳へ届く。頭上に浮かんでいる距離を考えるとおかしいが、囁いているように柔らかい声は何故かしっかりと聞こえて来るのだ。

「この土地に通ずる者？」

里菜は考えて聞いているのではなかった。ただ、理解できない今の状況に混乱したままおうむ返しにするのが精一杯なのだ。

「そう。里菜は一昨日からここへ来ているだろう？ その程度ならば我にもわかる。我はあの家の者を護る、もちろん里菜もだ。その為には知っておくべき事だからね」

不思議な事を口にする少年に、里菜は首を傾げる。

「ここから見てるって事？」

木々に囲まれたこの空間から家を見る事は叶わない。わかっていたが、この少年は普通ではないと思うからこそ出た言葉であった。「ずっと見ているわけではないよ。普段とは違う感覚がしたから気を向けただけだ。どうやらしばらくはここにいらしいという程度には感じ取れた」

少年はずっと穏やかな笑みを浮かべてこちらを見つめている。それをただぼんやりと見つめ返していた里菜は、ゆっくりとだが意識を通常へ戻しつつあった。

こうして透けた少年が言葉をかけて来る状況の異質さが、はつきりと意識できるようになって来たのだ。

その時、遠くから里菜を呼ぶ声が聞こえて来た。どうやら祖母が心配し自分を探しているらしいと振り返る。

すると今度は少年が後ろから声をかけてきた。

「清実^{きよみ}が心配しているようだね」

再び首を戻した里菜の目には変わらず笑みを浮かべた少年が映り、今は先程よりも遠くを見ているらしい様子が感じ取れた。

「いつもそうしているの？」

何となくだが里菜はそう口にし、聞いた少年は不思議そうな表情を浮かべる。

「そうしているとは？」

「浮かんで家を見ているの？」

石の上にふわふわと漂っている姿を改めて眺めていると苦笑された。

「そのような事はない。里菜、今は早く戻った方がいい。我はいつでもここにいるから、またおいで」

すると少年は掻き消えるように失われてしまう。里菜は呆気に取りられたが、遠くから呼ぶ祖母の声が聞こえる為にこの場を離れるのはなかった。

里菜は名を呼ぶ祖母へ返事をしながら、家の裏から表へと足を走らせる。

しかしそれは呼ばれているからというよりも、たった今まで置かれていた不可解な状況から逃れる為とも言えた。

何故、あの少年は浮かんでいたのか？

いや、そもそも彼は何者なのか？ 石の上にふわりと浮かび、背後の景色を透けて見せながら話しかけてくる。尋常ではない。

（あれって幽霊？）

神だと言っていたが、信じるべきなのだろうかと里菜は脳裏に少年の姿を思い浮かべてみる。

第一印象は和服姿だった。

今は夏であり祭りが多い季節でもある為、浴衣姿を見かける時期

ではある。だが、少年の雰囲気はそうしたのではなく、それが当然であるかのように感じられた。

髪はおそらくではあるが黒いのだろう。彼は全てが透けている為に全体的な色彩が薄く、何もかもが本来よりも淡くなっているのではないかと考える。

肌の色も随分と白く感じられた。

（わたしなんかよりもずっと色白な感じだったな）

状況はおかしいと思えているが、少年自体に対する恐ろしさは不思議となく取りとめもなく感想を思い浮かべる。

すると、里菜の返事に気付き家の裏手へ目を向けていた祖母に気付く。

「おばあちゃん」

笑顔で駆け寄る里菜に対し、祖母もまた心配そうだった表情を笑みへと変える。しかしすぐに眉は寄せられ、向けられた口調はきつかった。

「里菜！ 姿が見えないから心配したんだよ。どこへ行ってたんだい？」

そういえば何も言わずに外へ出たと思い出し、里菜は素直にごめんなさいと言う。

「ちよつと散歩でもしようと思って……」

この土地へ来てから三日。本当に来たばかりであり土地勘もないのは確かだった。当初は庭から見える範囲を歩こうと思っていたのだが、いつの間にか裏へと足を伸ばしてしまったのだ。

「それで裏へ行ったのかい。あまり奥に行つては駄目だよ、熊だつて出るんだからね」

「熊がいるの？」

さすがにそれには出会いたくない、咄嗟にそう思ったが、よくよく考えるとそれ以上のものを自分は見ているのではないかとも思う。しかし、言わぬ限り祖母が気付く事はない。それ以前に言ったところで信じてもらえるのだろうか。

熊は秋口あたりから裏山にある柿の木へ来る事はあるが、出会우는事はそうそうなく、その木自体も思った以上に奥にあるらしい。聞いている限りでは里菜が辿り着いた場所はまだまだ手前のようなだった。

「石が三つある所にいたんだけど、あそこは行っても大丈夫？」

少年がまたおいでと言っていた事を思い出し、里菜はそう質問をする。

すると、家へ戻る為に隣を歩いていた祖母が少し驚いた顔を見せた。

「神様の所へ行っていたのかい？」

その言葉に里菜はどきりとする。まるで自分が見ていた者を言い当てられたかのような気持ちだった。

「神……様なの？ あれ」

動揺を隠し切れないまま返事をした里菜へ、祖母は少しだけ語気を強くする。

「神様に向かつて、あれはいけないよ。あそこには水神様と、蛇神様と、神様がいるんだからね。そして、石じゃなくて祠って言うんだよ」

やはり墓石ではなかったのかと思いながらも、その前の物言いに引っかかりを覚えた。

「水神様と蛇神様はわかるけど、一つはどうして神様だけなの？」

各祠へどの神を奉っているかはわからないが、何故一つだけ明言されないのだろうか。水、蛇と来たならば、何かはつきりとしたものが欲しくなるのは当然の事と思われた。

疑問をぶつけられた祖母は、どうだろうねと小さく呟いた後に続ける。

「誰もわからないから、神様としか呼べないんだよ。もしかすると昔は知っていたのかもしれないね。おばちゃんのおばちゃんだって神様としか呼ばなかったから、随分とさかのぼらないとわからないくらいだよ」

「そう……なんだ」

里菜は少年の姿を思い浮かべながら、わからない神は彼なのではないかと考える。

「随分とあそこに興味があるみたいだね、もしかして神様でも見たのかい？」

玄関の扉を開けながら、祖母が発した内容に里菜はまた驚く。

「え？」

ただ、そう反応する事しかできなかった里菜をどう思ったのかはわからないが、祖母は笑いながら屋内へと足を踏み入れる。

「私のお母さんはね、子供の頃あの場所で白い神様に会ったってよく言っていたんだよ」

懐かしむような口ぶりの祖母を見つめたまま、里菜は何を言う事もなく思い出していた。

確かにあの少年の着物は白かった、と。

傍らに神様（二）

昨日は家に戻った後、神様へきちんとお参りをしたのかと聞かれた里菜はそんな暇もなく戻って来てしまったと祖母へ告げた。

なら、明日にでもまた行っておいでと言われた為、里菜は今日もあの場所へ向かっている。さほど遠いわけでもなく一人で向かって大丈夫な場所らしかった。

今回は祖母に告げて来た為、昨日のように探される心配もない。

だが、気がかりはそれではないのだ。

（本当にまた行っても大丈夫なのか……？）

全く行きたくないわけではないが、率先して行くべきなのかも迷いは生まれる。

別段恐ろしい目に合ってはいないが、果たして少年に再び会う事は良いのだろうか。昨日はほんの少し会話をした後慌てて戻る事となった為、彼に対する情報はあまり入って来てはいない。

なんとなくではあるが、危害を加えられるような事はないと思える。しかし、だからといって必ずしも安全とは言えないのだ。見知らぬ人には気を付けるべきだが、人なのかすらも怪しい。

（でもお参りはした方がいいみたいだし）

行かない事で何かが起きる可能性も浮かび、引き返そうとも思えない。

しかし里菜は迷いを覚えながらもしつかりと足を進めていた。昨日はあんなにも怯えながら向かった道だが、とにかく祠へ辿り着く分には問題がないとわかっているのだから、そこに悩む必要はないと先を目指す。

気にしなければならぬのは透けて見える少年であり、どういったものなのかの答えは見えていない。

（会えば、わかるのかな？）

興味と不安がない交ぜのまま、あっという間に目的地は見えて来

る。

そして何一つ変わらぬまま厳かに佇む祠の前には、やはりふわふわと少年が浮かんでいた。

「里菜、今日も来てくれたのだね。ありがとう」

まだ木々の隙間からかすかに姿が見える距離だというのに、少年の声ははつきりと里菜の耳へ入り込んで来る。決して大きく張り上げてはいない、囁くように優しい声は昨日と変わらずに聞こえて来るのだ。

その口調からして少年は微笑んでいるのだらうと、里菜は想像する。

会すべきか会わざるべきかを悩んでいたはずの気持ちは、すっかり彼へ向いてしまっていた。

「おはよう、里菜」

目の前へやって来た里菜へ少年は当たり前のように言い、里菜は戸惑いながらも挨拶を交わす。

「おはよう……ございます」

ぎこちなく敬語を使う里菜に少年は不思議そうに目を瞬かせた後、柔らかに微笑んだ。

「もっと気軽に話すといい。我はそのような事は気にしない」

浮かび上がったまま少年は祠の前にいたが、言葉と共に更に上昇し昨日と同じくその真上へと位置を変える。そして、そこで空中にいながら椅子にでも腰かけるような姿勢になる。

「我もこうして寛ぐのだから里菜もそこへ腰を下ろすといい。ちょうど良い大きさだらう?」

透き通った白い指先が指したのは、祠の斜め向かいに位置する一つの切り株だった。

円状に開けたこの場所は祠が並ぶ以外は草が生い茂っているように見える。だが、今少年に教えられる事で気付いたのだが、一つだ

け座るには良いと思える切り株があった。

里菜は素直にそこへ腰をかけて少年を見上げる。

切り株の周りには二十センチ程の背丈の草が生えており少々邪魔にも感じたが、Ｔシャツ、ジーンズとスニーカー姿である今は特に気にする必要はなかった。晒されている腕や首元にもたつぷりと虫除けスプレーを吹きかけて来た為、あまり虫に刺されもしないだろうと気軽なものだ。

「昨日は全然気が付かなかったな」

里菜が視線を切り株へ落とし呟くと、少年が仕方ないと告げる。

「そこへ腰かける者が最近はいない。いや、ここへ来る者自体が昔に比べ減ってしまったのだ。以前のように刈り取らぬのだから仕方がないのだよ」

今までにない暗い声音に里菜が顔を上げると、少年はわずかにだが寂しそうな表情を浮かべていた。

「おばあちゃんは来るんでしょう？」

祖母が定期的にここへ訪れている話を聞いていた為、里菜は聞く。「そうだね、最近は清実が最もここへ来てくれる。昨日からは里菜も来るのだから、喜ばしい事だ」

そう言いながら少年がゆっくりと揺れる様を里菜はじつと見つめ、不思議に思う。

「どうしてわたしは神様が見えるの？」

質問の答えを少年は知っているに違いないと思っていたのだが、どうやら違うらしい。少々困った表情を浮かべ、そのまま首を傾げれば少年の髪もそれに従いさらさらと流れ、浮いているにも関わらず重力に従っているらしい動きを見せた。

「どうしてだろうね」

「わからないの？」

「わからなくとも見えるのだから、それで構わないだろう？ 我が見える者は常ではないが、今までもいたからね」

どうやら理由も知らなければ、それに対する疑問もあまり持ち合

わせてはいないらしい。それと共に祖母が告げた言葉を思い出し口にした。

「わたしのひいおばあちゃんが見えたって聞いたよ」

すると少年は嬉しそうに笑みを浮かべ、それでいて何かを懐かしむような遠い目を見せる。

「秋乃あきのの事だね、里菜はあの子以来だよ」

少年が思い出している曾祖母の姿がどんなものかはわからないが、仏壇と共に飾られている写真で見るとは違うのだろうかと里菜は目を瞬く。あの子と言う響きは、どうしても幼い者へ向けられる言葉に感じられたからだ。

それに気付いたのかどうか、少年は言葉を続ける。

「里菜は秋乃に似ているのかも知れないね、見た目ではなく雰囲気がよく似ている。いや、我を見る者は皆そのような空気をまとっていたのかもしれない」

彼なりの質問への答えだったらしく、里菜は頷く。そして、質問の内容を変えた。

「神様の名前は？」

そうするとまた少年の表情は困ったものへと変化し、今度は考え事があったらしくしばしの間が空いた。

「皆が忘れてしまったからなのか、我ももう覚えてはいないね。遠い昔は知っていた気もするのだが……」

どうにもはつきりしない口ぶりに、里菜はわずかながらの知識を取り出してみる。

「蛇神様でも水神様でもない？」

「蛇神はこちらで、水神がここだ。我は何の神だったのだろうかね、不思議なものだよ。己の事もわからないのだから」

里菜から見て左手が蛇神、右手が水神だと指差した後、少年は本当に困ったように肩を落としたが、表情はすぐに穏やかな笑みに変化した。

「わからなくても大丈夫なの？」

先程とは違い名前がわからない事を気にはしているらしいと少年を見れば、今度は表情ががらりと変わる。

幼さの残る優しい顔から、何かを決意したようなしつかりとした眼差しをたたえた大人びた表情へ変わり、里菜は全くの別人のようだと目を見張る。

「ここへ来る者がいる限りは大丈夫だ。我がすべきはこの土地に通ずる者を護る事、誰かが覚えている限りは遂行できる」

「覚えている限り？」

「我を忘れずに訪れ、願いが叶い再びここへ訪れるのなら我は力を貸す。それが役目」

力強い瞳と共に紡がれた声色は優しさよりも厳しさの含まれるもので、今見せている姿こそが神らしいのではないかと思わされる。

どこか話しかけづらい雰囲気には押され、里菜はただ神を見上げるだけで何をする事もできなかった。

少年はそのまま何を思っているのかじっと一点を見つめ眉を潜めていたが、突然、まるでスイッチが切り換わるように元の穏やかさを取り戻す。

「少々役目の事に捕らわれてしまったようだ、すまないね。我は里菜の事を聞いてみたいのだが、どうだろうか」

自分の事を聞きたいと言われたものの、一体何を話せば良いのだろうか。そして、何より里菜は自分の事よりも少年の事をまだ聞きたかったのだ。

どうすべきかと少年を見上げたまま、里菜は考えを巡らせるがうまくまとまりはしない。

すると少年は小さく笑い声を上げたかと思うと、その体を里菜の目の前まで移動させて来る。そうして里菜の隣に並ぶように腰かけたが、切り株よりもわずかに浮かんでいた。

「何か他にも聞きたいのだろう、言ってごらん」

里菜の興味がまだ自身に向いていると少年は気付いたらしく、優しく告げる。

「どうして護っているの？」

「それも覚えてはいないね。何かの理由があつた気はするのだが、思い出せない。名と同じく皆が忘れると共に我も忘れてしまったらしい」

ならば、ここにある祠を知っている者の知識以上の事は持ち合わせていないのだろう。先程から少年は忘れてしまったと言う度に、かすかにではあるが寂しそうな表情を浮かべた為、里菜はこれ以上聞くべきではないのかと思う。

それでも疑問は自分の中にまだまだあり、少し言葉を選びながらも質問を変える。

「わたし達は何もしなくていいの？ 神様は願いを叶えてくれるんでしょう？」

「誰もが何もしていないわけではない。来られない者の願いを叶える事もあるが、ほとんどはここへ来て願い、それが叶うとまたやって来る。我はわずかな手助けをするだけであつて、全てを行なうわけでもない」

わかりづらい表現ではあつたが、願うだけ願うのは駄目らしい。結果が出た後にもここへ訪れ、自分自身もその願いに向けて努力しなければならぬのかと納得する。

「それでも叶ってしまった時点で神様は何かをしているんでしょう？」

来ない人間も出てきそうなものと里菜は思う。

「だから、来なければ少々困らせてみたりはするね」

「困らせる？」

「我も慈善ではないのだから護る以外の術も持っているのだよ」

少年らしいいたずらでもしそうな表情を見せた神は、楽しそうに声を上げて笑った。

そのまましばらくは、里菜が質問をして少年が答えるの繰り返しだったが、それもいつの間にか逆になり里菜が自分について説明し、そうかと思うとまた元に戻っていたりもする。

どうやら祖母の家だけではなくこの集落一体が神の護る対象であり、一定の間を置いて全ての家の代表者がお参りに来る事になっているようだった。そこからの血縁者として里菜のように含まれたりする者もいる。

はつきりとした線引きは決められないと本人も言ったので、何やら曖昧なものとして里菜は納得するほかなかった。

少年は学校について興味があるらしく、里菜は自分が通う中学校やそこで知り合った友人達についてを話す。それを耳にする少年は黙って聞いていたかと思うと、里菜が気にも留めないような事に疑問を感じぶつけて来る。

すると突然、少年が振り返った。

里菜がやって来た方向、今は祖母だけがいるであろう家の方向を見つめ呟く。

「そろそろ清実が帰りを待っているようだ」

「え……」

徐々に打ち解け会話が盛り上がって来たところへ水を差されたとして里菜は思った。だが、それ以外にも少年が祖母の感情を遠くから読み取ったらしい台詞に、やはり人外なる存在なのだろうかと改めて考えさせられる。

少年が振り向いた頭を元へ戻し口を開く。

「そのような顔をするのはおやめ、また来られるだろう？　早く戻るといい」

里菜が残念に思っているというのに少年の表情は笑顔のまま変わらない。少々面白くないと思いつつも、里菜もあまり長居をする心配されるだろうと納得し、今日はここまでにと神に伝えた。

少年は慣れてしまうとても話しやすかった。

里菜が問いかければわかる事は教えてくれる。わからなければ二人で悩み、ちょっとした事で笑う。存在自体は不思議であったが、

彼の背格好は里菜と同年代に見え、段々と少し変わった友人と思えるような気もしている。

出会ってから五日、里菜は毎日神の元へ行き、その姿を見ている祖母に今日はとうとう止められてしまった。

「里菜、行き過ぎじゃないかい？ そんなにあそこが楽しいのかい？」

強く咎められるような口ぶりではないが、あまりにも足しげく通う里菜に疑問を覚えているらしい。さすがに神に会う為に出向いていると言ふ事には不安を覚えた為、それらしく聞こえる言葉を探した。

「楽しいって言うよりは、あの場所が落ち着くの。今日はあそこで宿題してくる」

そうしてぶら下げていた手提げを上げて見せると、祖母は少し困った表情を浮かべたが、すぐに頷いてくれた。

「お昼までには戻って来るんだよ」

「わかってる、行って来るね」

そう言った自分を祖母が心配そうに見つめていると気付く事ができないまま、里菜は慌てて玄関に向かい裏山へと駆け出す。

今日は少年に宿題がどのような物かを見せる約束をしていた為、偶然手提げを持っていた。いい口実があったものだと思いつきながら鼻歌交じりに木々の間を抜ける。

「神様、おはよう」

そう言っただけで音が立てて走って来た里菜の目の前には、少年がふわりと浮かぶ。

「あまり慌てては転んでしまふよ、里菜。もう少し落ち着いておいで」

軽くたしなめられるが、それも嫌とは感じない。

「次は気をつけるね」

里菜は笑顔で返事をする、すっかり定位置となった切り株へ腰を下ろす。

それに倣い少年もたゆたいながら側へ腰を据えた事を確認すると、里菜は手にした物を掲げ話を始める。

「今日はちゃんと約束した物を持って来たからね」

「それは楽しみだ」

興味深そうに袋を見つめる少年の目は、本当に楽しみにしているらしいと里菜には感じられた。

「でも、そんなに楽しいものじゃないかも……。そうだ！ 神様もわかる事があつたら手伝ってね」

何気ない言葉だったが、少年は真剣に袋の中を覗こうとする。

「我にできる事があるだろうか？」

「見てみなければわからないでしょ？ とにかくこれ」

中に納めた書籍を一つ取り出して、里菜はページをめくって見せた。

傍らに神様（三）

激しく雨が打ちつける音を聞きながら、窓の向こうにある薄暗い空を里菜は見つめた。

「止まないのかな……」

この家に来てから十日。一度も雨が降らずにいた事を考えると恵みの雨とも取れるのだが、今の自分にとってはあまり重要ではない。昨日は日曜という事もあって叔父、叔母、祖母との四人で出かけていた。折角滅多にこないこちらに長く居るのだからと観光名所を巡り、丸一日を過ごしたのだ。

そして今日はこの雨である。

（神様の所へ二日も行けない）

これが里菜の本音だった。

特に叔父叔母や祖母と一緒に過ごす事が嫌というわけではない。三人という事も、近所の人達と話す事も、ここにいるからには当たり前の事だ。

それがわかっていながらも、あの少年の元へ向かえない自分がひどく落ち込んでいるのがわかった。

朝方から降り始めた雨は予報を裏切る事はなく、このまま夜まで降り続けるのだろう。

この強い雨足では裏山へ向かうのもさすがに無理だろうと里菜は溜息を付く。

足しげく通う自分を祖母が不思議そうに見ているのはわかっている。だが、あの場所とそこにいる少年が、里菜の一番興味があるものなのだから仕方がない。

彼は一日二日会わなかったからといって、文句の一つも言わないであろう事は想像できる。おそらくではあるが、明日にでも向かったならば変わらぬ笑顔で里菜を出迎えてくれるはずだ。

そして、それがわかっている里菜もきつと笑顔であの少年と対面

する。

それはとても嬉しい事であり、不満気な顔などできるはずがない。この会いたいと思う気持ちに嘘をつく事はできないのだ。

翌朝、昨日の雨が嘘かと思える程に、空は青く高かった。

鮮やかな緑色が広がる上に青、そして白く大きな入道雲。

そんな美しい光景を気にする間もない程に、里菜は木々の中へと足を踏み入れる。

どうしても会いたくてたまらない、そう思える少年の元へ一瞬でも早く辿り着きたいと、はやる気持ちも歩みも止める事はできない。「里菜、我は走らず来るように言っただはずだ」

まだ祠が見える位置ではなかったが、少年の声が耳に滑り込んでくる。

確かに以前、慌てず落ち着いて来るように言われていた。しかし、里菜にしてみると二日も我慢したのだから、少々走るくらい構わないのではないかという事になる。

言葉に従わぬまま足を進める里菜へ、また声が降りかかった。

「ぬかるみに足を取られぬよう、落ち着いておいで。そうでなければ我は今日、姿を見せないよ」

そう言われてしまうと里菜は従う以外の選択肢がなくなってしまう。目的としている者に会えないのでは、息せき切ってやって来たかいもない。

慌てて足を止めた為、かえって無理な力がかかってしまったらしい。里菜の右足がずるりと湿った草と泥の上をすべり、体が大きくバランスを崩す。傾いだ体をどうにか支えようと頑張ったが、その結果を得る事ができず里菜は両手を地面へと着いた。

言われた側からぬかるみに足を取られてしまったと思いながらも、四つんばいの格好になった里菜は体をゆっくりと起こす。再び滑る事だけは避けたいと慎重に立ち上がって見れば、ショートパンツか

ら伸びていた足の膝は泥に塗れ、靴も汚れてしまっている。今日は荷物がなかった為、それを投げ出す事態にはなかったが、両手は泥の感触で不快極まりない。

「声をかけぬ方が良かったようだ。すまない」

里菜の状況が見えているのか少年が謝る声が聞こえて来る。

声によって足を止めたのは確かであったが、里菜自身がこつも足場の悪い所を駆けていた事にもじゅうぶん否があると言えた。

「大丈夫、何もなくても転んだのかもしれないし」

この距離から神へ言葉が届くのかはわからなかったが里菜は返事をし、その後このまま向かうべきか引き返し足と手を洗うべきかを考える。

「里菜、こちらへおいで。側に水場があるから洗うといい」

こちらの心を読んだのかと思える程に的確な声が聞こえ、里菜はわずかにだが不安を覚える。

（わたしの思っている事が全部伝わってる？）

しかしそれに対する返答は一向に聞こえては来ず、少年は里菜を呼ぶ声を繰り返す。

「どうしたのだい？ 早くこちらへ来るといい」

やはりこちらの考え全てが伝わっているのではないのかと里菜は考え直し、今度はゆっくりと祠を目指し歩き始めた。

少年が言った水場は本当にすぐ側に存在していた。

三つの祠が並ぶうち、水神がいるという側にそれはあり、またいで渡れてしまいそうな細い幅に水が流れている。

円状の広場より二メートル程先は緩やかな斜面になっており、わずかに下った先がその沢だ。

里菜はそこを慎重に降りると、なるべくぬかるんでいない場所を選び、靴を脱ぎ足を水へと浸す。

昨日の雨の影響か、水はあまり綺麗とは言えない。茶色く濁った

それで洗う事に普段ならば抵抗を覚えたのかもしれないが、今は気にもせずに手を洗い膝をすすぐ。

「こんな所を流れているなんて気付かなかったな」

少年は広場から出る事ができないらしい。こちらに近い端で高くふわりと漂い、見下ろすように里菜を眺めていた。

「少し低く木々で見えないのだから仕方がない。これは家の脇を流れているものだよ」

言われた通りに家の脇には水が流れていたと里菜は思い出す。昔はこの水を飲んでいたのだと祖母が話していたそこは、今は農作業で汚れた物を洗ったりとじゅうぶん生活に根付いている場所だった。「あそこを流れてるんだからそうだよな」

手頃な石の上に移動した里菜は、他に使える物がないのだからとポケットから取り出したハンカチで足を拭く。そうして再び靴に足を納めると、少年の待つ広場へ向かい慎重に登り始めた。

その姿を認めたらしい少年は、緩やかに自分の体を切り株の側へと移動させる。風船のようにふわふわと動いて行く様はいつ見ても不思議であった。

「もっと早い時期であれば蛍も見れたのだが」

「蛍がいるの？」

少年の隣に腰を下ろしながら里菜は目を輝かせる。

蛍を見た事がないわけではないが、この場所で神と一緒に眺めるのなら更に素晴らしいものになるのではないかと思ったからだ。た。

「そうだよ。こちらに来るのが一月早ければ間に合ったかもしれない。家の周りでも見られるはずだ」

「六月末頃かあ、来年はどうだろうな」

一年後を思い浮かべる里菜へ、少年は聞く。

「里菜はいつまでここにいるのだい？」

その言葉に里菜は帰らねばならない事を改めて思い出し、表情を曇らせる。

「あと……二週間くらい、かな」

来週、母がこちらへ来る事になっていた。そのまま一週間で過ごし、二人で帰る予定だ。

着いた当初は早く帰りたいと思っていたはずの場所が、いつの間にか名残惜しく感じる事に里菜は戸惑いを覚える。おそらく言うよりも、確実に住み慣れた土地へ戻る方が自分の生活らしい。いや、学校もあるのだから帰らなくてはならないのだ。

別れを思い沈んだ面持ちになった里菜に気付いたのか、少年が言葉紡ぐ。

「あと、半分もあるのだね」

「半分も？」

自分が思いもしなかった言い回しをする少年へ里菜が目を向けると、嬉しそうな笑顔が飛び込んで来る。

「そうだろう？ 我と里菜はまだ同じだけの時を過ごせるだから」

もう時間がないのではなく、同じだけの時を過ごせる。その考え方は里菜に大きな力を与えた。少年にまだ会う事ができ、共に過ごせるのだと気付かせてくれたのだから。

「そっか。そうだよね」

そうして里菜が笑みを浮かべると、少年もやはり嬉しそうに笑うのだった。

「神様、見て！」

いつもと変わらず裏山へ向かった里菜は、上機嫌に少年の前で一つ回って見せた。

白地に大きく牡丹桜があしらわれた浴衣に赤い帯、そこへ白木の下駄と赤い巾着を合わせ、髪はアップにしている。祖母が今日の為にと買い揃えてくれた物だ。

「よく似合っているよ。今日は祭りなのだね」

「うん、叔母さんと一緒に花火を見に行くんだ。出かける前に神様

に見せたくて」

折角、滅多にない姿をしているのだからと里菜はこちらへ足を向けていた。

「綺麗でしょ？」

浴衣の袂をわずかに上げながら里菜が笑いかけると、少年は目の前へやって来て相好を崩し頷く。

「そうだね。里菜も浴衣も美しい」

「ありがとう。こうしていると神様とも似合うよね」

いつもと変わらぬ着物姿と並ぶように里菜は己の位置を変える。この少年が白い物をまとうているからと意識して選んだのだが、それを口には出さなかった。

「嬉しい事だね。今日は我もここから花火を見ようか」

こちらへ笑いかけた後に木々の隙間から見える空を見た少年へ、里菜は言う。

「わたしも一緒に見たかったな」

しかし、少年はそれを許しはしない。

「ここは暗い時刻に来るような場所ではないよ」

「それはわかってるけど……」

昼間でも薄暗い木々の道は、さすがに夜通ろうとは思えなかった。だから里菜は叔母と出かける事に決めたのだ。

どうやら不満を顔に出してしまっていたらしい、少年が苦笑する。「ならば、明日我に土産話をしてはくれないか？ 共に見られなくとも知る事はできる」

自分を待ち望むような事を口にした少年に里菜は大きく頷く。

「うん。明日も来るから、待っててね？」

「ああ、わかったよ。気をつけて行っておいで」

あまり時間もないままやって来ていた為、里菜はその言葉に頷くと家への道を引き返した。

途中、振り返り大きく手を振ると、少年も高く浮かんだまま手を振り返してくる。

ほんの少しの逢瀬でもまた会えるのなら構わないと、里菜は笑顔でその場を後にした。

しかし翌日、祠の元へやって来た里菜の目の前に神は現れなかった。

いつもならば自分が辿り着く前から姿を見せ、ふわふわと浮かんでいるはずの少年がいないのだ。一体何事かと里菜は声を上げる。

「神様？」

木々がざわめく中に里菜自身の声だけが響いた。

「神様？　ねえ、どうしたの？」

名を忘れた少年の呼び名はこれしかないのだ。里菜は何度も神を呼ぶ。

「神様？　神様？」

己の住まう祠の辺りに浮かぶ事はわかっていたが、里菜は見る範囲を広げた。どこからか少年がこちらを見つめてはいないか？　それを見逃すわけにはいかないと必死に名を呼び目を走らせる。

だが、少年が現れる事はなく、里菜の声がただただ響くばかりだった。

「どうして？　何かあったの……？　神様」

目の前にある祠を見下ろして里菜は呟き、何度も少年を呼んだ。それでも姿が浮かび上がりはせず、里菜はどうする事もできないまま涙を流す。

「神様………どうしたの」

しゃがみ込み少年がいつか現れるのではないかと里菜は待った。しかし、何時間待とうと少年の姿はなく、声を聞く事もできない。名を呼ぶ事にも疲れ、里菜はぼんやりと切り株に腰を下ろしていた。普段ならば隣には少年がわずかに浮かびながら座り笑顔を見せていたというのに、今は一人なのだ。

（どうして出て来てくれないの？）

それだけが何度も脳裏に浮かび、里菜は疲れた顔で祠を見つめた。

「里菜？ どうしたんだい？」

そこへ声をかけたのは祖母であり、里菜は気付かぬうちに側へ来ていた彼女を見上げる。

「おばあ……ちゃん」

泣き腫らした瞳でいる里菜を見た祖母は、目を大きく見開いた。

「何があつたんだい！ 里菜」

珍しく声を荒げた祖母へ、里菜は呟く。

「神様が……出て来てくれないの」

この時、里菜は初めて神の存在を口にした。

ただ神が出て来てくれないと泣く里菜を、祖母は半ば無理やりに家へと連れ帰った。帰りたくないと言口にする里菜を諭しながら優しく手を引いて家を目指し、辿り着けば落ち着くようにとジューズを差し出してくれる。

だが里菜はそれに手をつける事もなく、沈んだ表情でうつむいていた。こたつを挟んだ向かいには祖母が座っているが、そちらを見ようとさえ思えずただ少年に会えない悲しみに溺れる。

祖母はしばらくの間、黙って里菜を見つめていたが、優しく口を開く。

「里菜は本当に神様を見ていたんだね？」

一度口にしてしまったのだから、もう嘘をつく必要もないと里菜は頷いた。だが、異質な者を見ていた自分をどう思うのかと不安も顔を覗かせる。

「おばあちゃんは信じてくれるの？」

不安をそのまま口にした里菜へ、祖母はもちろんだと頷いた。

「私のお母さんが見えていたんだから、里菜が見えたっておかしくはないだろうね。おばあちゃんは信じるよ」

柔らかでありながらも真剣な眼差しを見せた祖母に、里菜はわずかにだが安堵し少年との時間をゆつくりと言葉に乗せる。

誰かに聞いてもらおう事でこの現状が変わるのならば、藁にでもすがりたい気持ちだった。

少年との出会いをありのまま伝えた里菜は、ようやく飲み物に手を付ける事ができた。落ち着いたというよりは、話した事で乾いた喉を潤おす行為だったのだが、何時間も水分を取らずにいた体にはやけに染み入る。

祖母は黙って話に聞き入り、今も里菜の様子を見つめていた。

一切自分を否定しない祖母へ、里菜は聞く。

「神様はどうして出て来てくれないんだと思う？」

すると祖母は、神様だつて忙しいんじゃないのかい？ と答えた。どうしてだろうね。と答えが返つてくるとばかり思っていたのだが、祖母の意見は予想外のものであり、里菜は何度も目を瞬かせる。「神様もただそこにいるだけじゃないんだろう？ なら用事が会つて出て来れない時もあるのかもしれないよ」

行けば姿を見せる事が当たり前だと思っていた里菜は、驚きを隠せないまま聞き返す。

「また出て来てくれるって事？」

「それはわからないよ。何日もかかる用事だったら、神様はしばらく出て来れないのかもしれない」

祖母の言葉を聞きながら里菜は思い出していた。いつもそうしているの？ と聞いた時にそのような事はないと答えた少年を。それは、出て来れない時があると考えても構わないのかもしれないと、里菜へかすかな希望を感じさせた。

一日姿が見えないからと騒ぎ立てる必要はなく、明日になれば少年はいつものように浮かんでいる。それもなくてはならないと考える事ができた里菜は呟く。

「また……出て来てくれるのかな？」

「いつかはわからないけど出て来てくれるかもしれないね」

祖母の言葉に里菜は頷き、ようやくわずかな笑みを浮かべる事ができた。

しかし望みが叶う気配はなかった。里菜は毎日足しげく通い祠の前で手を合わせ願う。

（どうか、神様が現れますように）

願いを叶えると言った少年を信じ、里菜は想いを込める。

お盆休みに入り、こちらへやって来た母が不思議そうにしているのはわかっていた。里菜が毎朝裏山へと足を伸ばし祈りを捧げている姿はどのように映っているのか？心配されているのではないか。それでもやめる事はできない。

お願いだから、もう一度だけでもいいから出て来て欲しい。

里菜は強く少年を呼び続けていた。

しかし想いが届く事はなく、里菜は帰路へと着く。

「また来るからね……神様」

その言葉が伝わっているのかさえ、わかりはしなかった。

傍らに神様（四）

翌年も里菜はこの山へとやって来た。去年のように一月もいられはしなかったが、数日祠へと足を伸ばした。

しかし、少年はやはり現れず里菜は肩を大きく落とす。

その次も、またその次も里菜は祠へやって来た。だが、何年やって来ようと神の姿を見る事はできず、里菜は少年を忘れる振りをする事に決めた。

どうして姿を見せなくなったのかはわからないが、おそらく彼にはもう会えない。そう思わなくては生活ができなかった。

「本当に久しぶりだわ」

あの時から随分と老け込んだ祖母を目の前に里菜は話して込んでいた。

「八年ぶりくらいかい？」

「大学二年までは来ていたんだから、そうね。就活とかもあったし、自然と来れなくなったって感じかな」

少年にはもう会えないのだろうと諦めもあったが、実際に忙しさも手伝って足は遠のいたのだ。

「そんなものだろうね」

祖母は数年ぶりに会う里菜を歓迎し様々な話をする。里菜もそれに応えて色々な事を伝えたが、突然会話は止まる。

そして随分と真剣な眼差しで祖母が見つめている事に気づき、里菜は驚いて聞く。

「どうしたの？ おばあちゃん」

これまでに見た覚えのない様子のままに、ゆっくりと祖母は告げる。

「あの時は神様が忙しいと言ったけれど、本当は違うんだよ」

「え？」

突然に切り換わった話題に上手く返事ができなかった里菜は、何

故か体を強張らせた。

祖母はいつたい何を言っているのか？ 違うとはどうした意味を含んでいるのか、わからぬままに目を瞬かせる。

その反応を予想していたのかどうか、話は続いた。

「神様が見えなくなつた前の日に、おばあちゃんをお願いをしたんだよ。里菜に会わないで欲しいってね」

「おばあちゃんが？」

祖母は里菜と叔母が花火代会へ行っている間に祠へ向かつたらしい。そこで姿を見る事はできないが、いるであろう少年に対する願いを口にした。

「あんまりにも里菜があそこへばかり行くからね。心配になってお願いに行つたんだよ。里菜をあまり連れていけないで欲しいって、神様はそれを聞き入れて下さつたんだろっね」

「そう……なんだ」

唐突に知らされた真実に里菜の思考はうまく働かない。ただ、そうなのかと思うばかりで、他の感情が溢れる事もなかった。

そして祖母は里菜が知らない何かを思い出したらしく、苦笑しながら告げる。

「あの後、里菜が帰るまではあそこへ行かなかったからね。神様も怒りなさつたんだろっ。随分とうるさくされたよ」

不思議な物言いに里菜は首を傾げた。

「うるさく？」

すると祖母は大きく頷く。

「里菜が帰つてすぐに、風も吹いていないのに裏口の扉ががたと大きな音を立ててね。壊れてしまふんじゃないかと思う程だったよ」

身振りを使って表現する祖母の話聞く限り、相当大きな揺れと音があつたようだと思ふ。どうやら目に見えぬ物がぶつかつて来ている、そういう現象らしかった。

そこから祖母は一月ばかり毎日通い、お礼を繰り返したらしい。

「実際は一週間ぐらいで静かにはなったのだけれど、さすがにすぐには止められなかったね」

怖いものではなくただ懐かしい出来事だと語る祖母へ、里菜は再び首を傾げた。

「そんな事をするイメージじゃなかったけどな」

物腰の柔らかさばかりが目立つ少年のはずだと記憶を手繰ると、護る以外の術も持っていると言った姿が思い出された。己の役目を語る時のみ厳しい声色を発した少年の、護る以外の術がそれなのかもしれない。

「いつもは優しいお方なんだろう。願いを叶えてくれたにも関わらず、すぐにお礼に行かなかった私を叱ったんだろうよ。もしかすると神様も里菜の事を好いて下さっていたのかもしれないね」

神が叱るという行為を当たり前のように受け入れている祖母は、わずかに苦笑する。そして、里菜へ聞いた。

「今日はいかないのかい？」

里菜は己の腕の中で眠る我が子を撫でながら、当然だと言わんばかりに口を開く。

「行くわよ。この子も見せたいし」

少年が現れなかった理由を知った今、里菜は何も迷う必要がなかった。

がさがさと音を立てて歩く道は相変わらずであり、里菜は懐かしさと共に歩みを進めていた。高く伸びた木々の隙間から差し光は薄く、山の中はひんやりとした空気を漂わせている。

（最近はおばちゃんもあまり来れないみたいね）

そう思いながら足元にあった枝を一つ拾い上げ、大きく張り巡らされたくもの巣を絡め取る。罌のようにいくつもあるそれを、見つける度に取り払い里菜は奥を目指した。

程無くして現れた空間の中へ入ると、里菜は目的の祠の前へ立つ。

風化し丸みを帯びた石に生えている苔、それは以前よりも更に古めかしく感じられた。

久しぶりの為か妙な緊張があり、里菜は一つ深呼吸をした後に口を開く。

「神様、そろそろ出て来てもいいんじゃない？ おばあちゃんももう良いって言うてるわよ」

あの時から倍以上の年齢になった里菜は、昔のように少年を呼ぶ事はできない。それだけの時間が過ぎ、それなりの経験を積んで来たのだ。そのままのものもあれば変わった部分もある。

今の里菜はこうして少年に語りかけるほかはないのだ。

きつと少年に言葉は聞こえているのだろうと、里菜は待った。自分の声を聞き少年がどう思うのかはわからない。だがきつと目の前へ現れるであろう。里菜は確信を持って祠を見つめ続ける。

答えが出るまで、あまり時間はかからなかった。

昔のように現れないと泣く事もなく、我が子を抱きながら立っている里菜の耳へ柔らかな声が滑り込んでくる。

「久しぶりだね。里菜」

そうして祠の真上に浮かび上がって来た少年は、あの頃と何一つ変わってはいなかった。

白い着物に幼い顔立ちのまま、優しく笑みを浮かべこちらを見つめている。

「久しぶり過ぎだわ」

あまりにも変わらない少年を見上げながら里菜は言う。どうしようもなく嬉しいのだが、心に反して口から出る言葉は素っ気なかった。

「そうかもしれないね」

ゆらゆらと漂う少年は苦笑しながらもこちらへ近づいて来る。視線の合う高さに頭を合わせて浮かぶ少年の姿を見ながら里菜は、足元と地の間の距離に改めて自身の成長を感じさせられた。

「里菜は随分と大人になった……美しくなったね」

里菜が変わろうとも少年は変わらない。紡がれる言葉も、声色も、表情も、何もかもがあの時のままであり、やはり神という存在なのかと里菜は思う。

「神様、ありがとう。わたしも二十八よ。あの時と比べたら随分大人になったと思うわ」

たった半月を過ごした相手へ憧れ、突然失われた存在に絶望した十三歳の自分。会えない悲しみに幾年も縛られはしたが、それは決して無駄なものではないと今の里菜には言えた。

「せめて、別れくらい言ってくれば良かったのに」
「ならばあんなにも辛い思いをしなかったと漏らせば、少年は困ったように眉を下げる。」

「それでは清実の願いを叶えられなかったのだよ」
神に会う為に毎日山へ駆けて行く孫は、祖母に大きな心配をかけていたのだろう。里菜はたくさんの出来事を思い出す。

「わかつてる。おばあちゃんにも理由を聞いたし……わたしがいくら願ったって出て来てくれなかったのも今ならわかる」

祖母の願いと里菜の願いを比べたならば、自分の願いは叶わない。それは込められた想いが違うからだとしり菜は頷く。

「神様は恋をする相手じゃないんだもの」
そして、当時にはわからなかった想いを言葉に乗せる。

「わたしは、神様が好きだったのよ？」

少年は特に困った様子も見せずに、むしろ嬉しそうな眩い笑み浮かべた。

「知っていたよ。それはとても嬉しい事だ。我も里菜が好きだよ」
こうして親愛の情を口にする神は、決して色恋の意味を含んではない。ただ、素直に好いているのだろうとしり菜は思う。祖母も曾祖母も里菜も、少年にとっては皆が同じような存在に違いないのだ。「相変わらずね、その調子で話せる人みんなが神様に惚れたんじゃないの？」

意地悪く言つてやると、少年は珍しく目を見開いた。しかしそれ

はすぐに笑みで優しく細められ、囁くような声が聞こえる。

「そのような事はない。我も役目とは別の感情も持っているのだよ。……我は神という存在なのだから、役目以外の事を求めてはならない。それでも里菜に会わずにいるのは止められなかった」

その言葉は里菜にとって嬉しいものであり、どうしても顔が綻んでしまう。

「少しはわたしと同じだったと思ってもいいって事？」

例えこう口にしたとしても里菜と少年の関係が変わる事はない。

あくまでも彼は神なのだ。

「構わないよ」

里菜が少年の存在を理解し、己との間にある線引きに気付いているからこそその答えなのだろう。確かに神も里菜を好いていた、そう言ってくれる。

「その割には久しぶりだつていうのに昔と変わらないわね。まるで昨日にでも会っていたみたいだね。わたしと神様じゃ感覚が違うのかしら？」

内容は嫌みだったかもしれないが、里菜は笑いながら言葉を発し、少年も仕方なさそうに笑う。

「何十年も人と話す事がない時もあるのだから、仕方がないだろう？　里菜、我にとつてはまだまだ短い時間なのだよ」

祖母も曾祖母もあの子と呼ぶ少年は、どれ程の時をここで過ごして来たのだろうか。それはおそらくこの土地に住む者が知らないのだから、神も覚えてはいないはずだった。

それだけの時間を知る少年にとつては、確かに十五年などわずかなものなのかもしれないと里菜は溜息を付く。

「そう言われたら仕方がないわ」

「そうだろう？」

そうして笑い合う里菜と神の声に、更に一つが加わった。眠っていると思っていた娘が腕の中で笑い声を上げたのだ。瞳を大きく開き、少年のいる方向を見つめる姿に言葉が漏れる。

「あら、この子も神様が見えるのかしら？」

「そのようだね」

はつきりと言いながら少年が覗き込むと、我が子はやはり嬉しそうに声を上げた。

それを認めると里菜は一步体を後ろへ下げ、少年をねめる。

「この子はたぶらかさないでよ？」

距離を置かれた為か言葉の為か、少年には残念そうな表情が浮かぶ。

「我は里菜をたぶらかしたつもりはないのだが？」

「確かにわたしもそんなつもりはないわ」

その通りだと頷けば、今度は少年の肩が落ちる。

「里菜は以前より少し、意地悪になったね」

「失礼ね」

そうして笑い合い、二人の間には他愛もない話の花が咲く。

「里菜、今回はいつまでいるのだい？」

懐かしい少年の物言いに、里菜は今日で何度目なのかわからない笑みを浮かべた。

「今晚泊まって明日には帰るわ。二人で来ちゃったから旦那も待つてるだろうしね」

里菜には今、愛する夫がいて娘がいる。それは何よりも大切で守るべき者であり、自分もきつと守られる者なのだろう。

そして、少年はそれとは違う位置に存在する。

決して共に過ごす事はできないが、忘れる事もできない……このまま里菜の中に住まい続ける大切な者なのだ。

「ねえ、今なら蛭が見れる時期でしょう？ 夜にここへ来てもいいかしら、さすがにこの年なら許してくれるわよね？」

特に意識して六月を選んだわけではなかった。自分や夫のスケジュール、娘の成長に合わせ、丸二日空けられる時を探した結果、それが今日だったのだ。

十五年も前に少年が口にした、ここでは蛭が見られる。それを確

かめる事のできる時期に偶然足を運ぶ事ができた。

（それとも必然だったのかしら？）

里菜がそんな事を思っていると、少年の声が滑り込んで来た。

「本当に大丈夫かい？」

心配そうに見つめてくる姿に、里菜は心配し過ぎでしょ。と返事を
する。

「懐中電灯を持ってくれば大丈夫よ。家からも近いしね。ほんの少
しの時間になるだろうけど、いいでしょ？」

まるで子供を見つめるような瞳に里菜は苦笑し、少年は困ったよ
うに眉を寄せた。しかしすぐに嬉しそうな笑みが浮かぶ。

「なら気をつけておいで、我も里菜を見守っているよ」

「ありがとう。今回の約束は破らないでよ？」

ないとは思いつつも念を押せば、今度は少年が苦笑した。

「ああ、大丈夫だ」

「じゃ、またあとでね」

「気をつけて帰るのだよ」

そうして家へ戻り始めた里菜は立ち止まり、振り返る。

あの日と同じように、祠の傍らには少年がふわふわと浮かびこち
らを見つめていた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8732t/>

傍らに神様

2011年6月9日12時25分発行